

研究論文

外来文化と日本の社会構造

張 雲駒*

はじめに

日本はこれまで、外来文化による全面的な影響を二度受けている。日本を根底から変えたこの二度の文化交流はあるいは衝撃と言ったほうがもっと事実に近いかもしれない。この外来文化の大波が人類の社会生活のあらゆる面に於いてその影響力を発揮した。日本は完全に呑み込まれたと言っても過言ではないように思われる。

六世紀末に三世紀以降漢王朝が滅びてから分裂状態が長く続いた中国が隋（西暦581～618）と唐（618～907）の時に復興を成し遂げ、繁栄の時代に入っていた。中華帝国の強大と威光が各分野に於いて日本を震撼させ、心から感服させた。当時の日本の支配階層の目には、唐王朝の政府管理体制、仏教思想の制度化が特に魅力的なものに映っていた。遣隋使、遣唐使が数多く中国に派遣され、中国の政治、経済、文化、芸術など各分野の経験を全面的に学び、吸収し、日本の政治、社会、経済などの構築と発展に生かした。つまり、日本は自ら進んで中国文化を吸収し、誠心誠意に中国文化を受け入れたのである。

十九世紀、ペリーの黒船来航を皮切りに、西洋列強から押し寄せてきた外来文化が再び日本を覆いかぶさった。この文化来襲に際し、最初

の時期に強制的に開国せざるを得なかったという経緯があるが、日本社会は最終的にその柔軟性を以って巧みにこの外圧を生かし、国内の改革を進めた。1868年に徳川幕府を終結させ、1871年には大名の領地をも剥奪させた。政権を握った明治政府が日本の資本主義近代化を目指し、一連の法令を制定し、当時の日本社会のあらゆる面に及ぶ改革措置を取り、強力に社会の変革を進めた。日本を資本主義列強クラブに入れることに成功した。

主動的に中国文化を導入したのに対し、西洋の外圧に日本は一時的に異国排斥を唱える攘夷論も高まったが、最終的にはほとんど抵抗することなく、批判することなく異文化を歓迎した。長い歴史のなかで、強勢な外来文化と接するときに、日本は常に無条件で、心底から受け入れる態度を採ってきた。それが原因か否かわからないが、日本は創造力に乏しく、まねることしかできない国だとかなり多くの人がそう考えている。その理由として、一つは地理的に孤立していることから、よその文明についての情報が入りにくく、日本人は見識がない。もう一つは日本社会の発展は各歴史段階に於いて世界の主流国にいつも遅れをとっていることである。では、果たして本当にそうなのか？

*中国濰坊学院外国語学部副教授

I . 中国文化との交流

隋、唐の時代に於ける中国文化の日本への影響は広範囲に渡っている。政治面では、日本の留学生が帰国後、唐の各種制度に倣って、「大化改新」を進め、徐々に日本で封建制度を確立した。文化面では、日本は大量に唐の文化を吸収した。唐の教育体系に倣って、儒家の經典を教科書に中央で「太学」を設け、地方で「国学」を設立した。生活面でも唐風に強く染められ、唐の製茶法を学び、更には発揚し、独自の特色を持つ茶道を形成した。日本の伝統服である和服も唐の服から変わってきたものである。日本人はほかに唐から豆腐、醤油、砂糖、縫製などの製法、技法をも習得した。囲碁もこの時期に日本へ伝わった。唐と日本文化との関係について内藤湖南はこう指摘した。日本は中国によって育ったのではなく、日本にとっての中国文化は豆腐のニガリのようなもので、中国的ニガリによって、日本は大豆の液体を豆腐にしていたという。隋、唐の時代に中国文化が日本文化の形成と発展に於いて強く影響力を發揮したことにまず異論は出まい。

中日間の文化交流は我々に唐文化の強さを感じさせるだけではなく、同時に日本民族は先進文化を習うことに於いて非常に優れていることをみな感ずるであろう。この勉学精神が日本の経済、文化の発展を推し進めているとも言えよう。隋、唐の時代に盛んだったこの友好交流の歴史は平和な友好往来こそ兩國を互いに進歩させるものだとして後進に語っている。中国の文化は源が長く、広く、大きく、奥深く、隋、唐の時に全面的な繁栄を誇った。隣国が留学生を多く派遣してきたことは事実である。なかでも日本はその影響を最も大きく受けた国の一つであつたらう。630～894年の間に日本は十数回の遣唐

使を中国に派遣した。少ない時に250名、多くて600名のエリートが長安の「太子監」で各種知識を学び、各地を見物し、唐の風俗民情を満喫していた。小野妹子、阿倍仲麻呂をはじめとするこれらの遣唐使は帰国してから、各分野で活躍し、素晴らしい業績を残した。

遣唐使は中日の文化交流史に於いて特筆するべきもので、日本の文化、社会、経済などの発展に於いても、中日間の友好交流に於いても大きく貢献したと言えよう。遣唐使の貢献でまず挙げたいのは唐の典章律令を持ち帰って、日本の社会制度を革新したことである。ほかに、長安での勉学あるいは見学中に遣唐使たちは数多く文献を読み、帰国後に唐の教育制度に倣って各種学校を設立し、大量な人材を輩出させたことである。唐文化を吸収し、日本の文化、芸術水準をも高めた。遣唐使は毎回大量な漢文書籍、仏教經典を持ち帰り、日本では唐詩漢文を詠む光景がしばしば見られた。李白、白居易などの詩が日本で広範囲に伝った。唐の書道、絵画、彫刻、音楽、舞踊なども受け入れた。唐文化の伝播は外在するものより、内在する日本人が持つ他国の経験を活用して自国を発展させる優れた吸収能力によるものが多いかも知れない。

唐に留学して帰ってきた人物を策士に、645年に中大兄皇子は乙巳の変にて蘇我氏を滅ぼし、大化の改新といわれる政治改革を行った。その中核となる政策は1. 豪族の私地や私民を公収して田地や民はすべて天皇のものとする公地公民制。2. 国、郡、県などを整理し、令制国とそれに付随する郡を整備し直した国郡制度。3. 戸籍と計帳を作成し、公地を公民に貸し与える班田収授の法。4. 公民に税や労役を負担させる租庸調制を実施した。ほかに、薄葬令、習俗の改革、伴造、品部の廃止と八省百官の制

定、大臣、大連の廃止、冠位制度の改訂、礼法の策定などを行った。大化の改新には、遣唐使の持ってきた情報を元に唐の官僚制と儒教を積極的に受容した部分が見られる。しかしながら、従来の氏族制度を一度に変える事は不可能なため、日本流にかなり変更されている部分が見受けられる。家永三郎が『日本文化史』のなかでこう指摘している。『班田収授の法がしかれて、人民には一定額の田が班給される一方、租・庸・調・雑徭・兵役・出挙などの莫大な租税が課せられた。それらのうちには、租や出挙のように農業収穫物を収奪されるものもあるが、それよりも労働力として直接身体を使役される負担のほうが大であって、その意味で、一般人民は「公民」、「良民」という身分にもかかわらず、奴隷的性質を持っていたとみられないでもない。良民の下には賤民があった。賤民の中でも私奴婢のごときは家畜同様に売買される財物として取り扱われたが、氏姓制社会の時代にひきつづいて、その全人口に占める比率は低かった。したがって、奴婢等の賤民が存在したというだけの理由で、律令社会を奴隷制社会と規定することは適当でないであろう。』¹

618年、隋に代わって中国を統一した唐は大帝国を築き、東アジアに広大な領域を支配して周辺諸地域に大きな影響を与えた。西アジアや中央アジアなどとの交流も活発であり、首都長安は国際都市として繁栄した。玄宗の治世前半は「開元の治」と称された。周辺諸国も唐と通交して漢字、儒教、漢訳仏教などの諸文化を共有し、東アジア文化圏が形成された。その中であって、日本の律令国家体制では、天皇は中国の皇帝と並ぶものであり、唐と同様、日本を中華とする帝国構造を有していた。

630年の犬上御田鎌にはじまる日本からの遣唐使は奈良時代にはほぼ20年に一度の頻度で派

遣された。大使をはじめとする遣唐使には留学生や学問僧なども加わり、多い時には約500人に及び人々が4隻の船に乗って渡海した。日本は唐の冊封は受けなかったものの、実質的には唐に臣従する朝貢国の扱いであった。使者は正月の朝賀に参列すると、皇帝を祝賀した。当時の造船術や航海術はなお未熟な点も多く、海上での遭難も少なくなかった。危険を冒して遣唐使たちは多くの書籍やすぐれた織物や銀器、陶器、楽器などを数多く持ち帰り、唐の先進的な政治制度や国際色豊かな文化を持ち帰り、当時の日本に多大な影響を与えた。なかでも知識に対する貪欲さは凄まじく、皇帝から下賜された品々を売り払って、その代金すべてを書籍購入に注ぎ込むと唐の正史に記されるほどであった。文物だけでなく、知識を身につけた留学生や留学僧も日本に戻って指導的な役割を果たしている。例えば、帰国した吉備真備や玄奘は後に聖武天皇に重用され、政治の世界でも活躍した。

奈良時代は中日文化交流の新しい頂点である。新しい農業制度、班田制度は生産力を高めた。中国から流入した農業技術が広く伝われ、先進的な農具が広範に使用された。儒家と道家の精神も日本に浸透し、日本の文化と日本人の思想に深く入り込んでいた。

Ⅱ．欧米列強との遭遇

1853年、マシュー・ペリー准将が率いるアメリカ合衆国海軍東インド艦隊の蒸気船二隻を含む艦船四隻が久里浜に到着した。港は砂浜で黒船が接岸できなかったことから、幕府は江戸湾浦賀に誘導した。アメリカ合衆国大統領国書が幕府に渡され、翌年の日米和親条約締結に至った。この事件は幕末の始まりだが、近代日本の

幕開けとも言えよう。後の明治維新は黒船来航に象徴される欧米列強の経済的、軍事的進出に対する攘夷運動に起源を持つ。

アヘン戦争以後、東アジアで欧米による帝国主義の波が強まるなかで、長年の国是であった鎖国体制を極力維持し、旧来の体制を維持しようとする思想が現れたが、江戸幕府は朝廷の意に反する形で開国、通商路線を選択したため、攘夷運動は尊王論と結びつき、朝廷の権威のもとで幕政改革と攘夷の実行を求める尊王攘夷運動として広く展開されることとなった。

一方、開国、通商路線を是認する諸藩の中にもいわゆる雄藩を中心に、幕府による対外貿易の独占に反対あるいは欧米列強に対抗すべく旧来の幕藩体制の変革を訴える勢力が現れた。これらの勢力もまた朝廷を奉じてその要求を実現させようとした。京都を舞台に朝廷を巡る複雑な政争が展開されることとなった。尊王攘夷運動は薩英戦争や下関戦争などに於いて欧米列強との軍事力の差が改めて認識されたことで、観念的な攘夷論を克服し、国内統一、近代化を優先させ、外国との交易によって富国強兵を図り、欧米に対抗できる力をつけるべきだとする「大攘夷」論が台頭し、尊王攘夷運動の盟主的存在だった長州藩も開国論へと転向していくことになった。

幕府は公武合体政策のもと、朝廷の攘夷要求と妥協しつつも旧体制の存続を志向したため、次第に雄藩らの離反を招いた。黒船来航以来の威信凋落もあって、国内の統合力を著しく低下し、幕末は農民一揆が多発するようになった。このような情勢のなか、諸侯連合政権を志向する土佐藩、越前藩らの公議政体論やより寡頭的な政権を志向する薩摩藩の主張などが出た。幕府を廃し、朝廷のもとに権力を一元化する国内改革構想が現れた。旧弊な朝廷の抜本的な改革

を伴う必要があった。この両者の協力による王政復古が行われ、戊辰戦争による旧幕府勢力の排除を経て権力を確立した明治新政府は薩摩、長州両藩出身の官僚層を中心に富国強兵、殖産興業、文明開化という三大目標を掲げ、急進的な近代化政策を推進していった。

結果的には幕府が倒され、明治政府による天皇親政体制の転換とそれに伴う一連の改革が行われた。その範囲は中央官制、法制、宮廷、身分制、地方行政、金融、流通、産業、経済、文化、教育、外交、宗教、思想など多岐に及び、日本を東アジアで最初の西洋的国民国家体制を有する近代国家へと変貌させた。

Ⅲ．日本の社会構造

強力な外来文化が押しかけてくる時に、日本はほぼ無条件で受け入れてきたことはいうまでもない。では、なぜなのか。地政学的に孤立していることで、日本人に見識がないからなのか。日本社会の発展は世界の主流国に遅れているからなのか。そう簡単に断言できるものではないはずである。

梅棹忠夫の比較文明論に立脚して考えれば、日本はイギリスなどの西欧諸国同様、アジア大陸、欧州大陸の各歴史段階の偉大文明との間には、関係を持ちながらも一定の距離を保っていた。これらの国に比べると、日本は自身の状況に合わせ、上記からその文明成果を吸収できると同時に、侵略と破壊から免れた。自国の社会、経済などの発展に専念できた。侵略され、破壊されてから、ゼロからまた始めなければならない社会に比べれば、日本と西欧諸国は国内文化と外来文化をうまく融合させ、内部に発展の空間を作ってきた。この背景の下で、日本も西欧も独立且つ平行に発展をしてきた。まず封建制

度を確立し、工商業を発展させ、資産階級を形成し、最終的に資本主義国家を作り上げた。産業革命が英国で起こったように、日本が欧米以外で資本主義近代化を実現した唯一の国になったことは偶然ではない。260年間ほど続いた鎖国政策がなければ、日英両国は理論上同時に産業革命を起こしたかもしれない。近代的な工業化に必要な条件が揃っていたのは西欧と日本だけである。近代に於いて日本は西欧のマネをしたのではなく、両地域がそれぞれ自発且つ独立で社会、経済を発展させてきたという。

梅棹氏は比較文明の専門家で、社会構造の発展と物理的距離の決定的な役割を特に強調している。国や地域の活力や創造性、不確実性などに否定的な態度を採っている。客観的に言えば、特定の時期とりわけ明治維新前の日本社会の状況をとってみれば、氏の比較文明論は説得力を持ち、成立すると思われる。日本が欧米列強に侵略される以前に既に他国にない資本主義の発展に適合している独特な社会構造を形成していることは何よりの証しであろう。日本は確かに二千年以上にわたって、持続的、有機的、自主的に発展をしてきた。日本は各階層に於いて多岐にわたって、臨機応変に新しい外来文化を受け入れ、包容してきた。欧米思想に慣れ、欧米の技術を吸収、消化する基礎を作り上げた。

日本がキリスト教世界以外での初めての近代化国家になった原因はその伝統社会の構造が東アジアの他国と違い、西欧諸国に似ているところにあるように思える。明治維新前、その文化構造がもはや多元化し、政経が分離していて、土地権と貨幣の発行権も別の階層に属している。政治上各藩が自立していて、江戸幕府は権限を独占した中央政府ではなかった。これらが近代化の発動に有利な条件を提供し、明治維新

を成功させた。

日本の近代化がほぼ完成してから、一部の学者が「東洋の近代性」をテーマに研究を重ねてきた。日本を西洋の言う未開化国と見なすより、平行した文明体と見なしたほうが良いと主張したのは梅棹氏であった。日本は欧米列強に遭遇する前に既に他国にない独特な社会構造を形成している。日本社会は玉葱式構造になっていて、外来の衝撃を受けた時に他の伝統社会によく見られる硬球式構造より弾力性がある。稲文化、仏教、中国文化、政治制度の取り入れから西洋文化への対応まで、劇的に見える変革過程のなかに終始貫徹しているのは高度な臨機応変性と明確な実用主義である。むしろ、そういう実用哲学には賛成者と批判者とが意見が対立している。多重の同一性が日本の硬直化を防いだと同時に多くの弊害をも抱え込んでいる。特に政商共同体と軍国主義はそうである。

富永健一氏は日本の近代化を四つの領域に分けて分析した。1. 経済の近代化は産業化による経済成長で実現した。2. 政治の近代化は分権体系の確立と民主化を通じて実現した。3. 狭義の社会の近代化は郷土関係と血縁関係で結ばれた集団（共同社会）から機能型集団（利益社会）へと変わり、閉鎖的な「ムラ」から開放的な都市に転換した。4. 狭義の文化の近代化は非合理的な迷信、古い慣習などから科学的、合理主義的な思考への脱皮によって、「天理」を「公理」に変えていった。非西洋世界の近代化過程は創造的なもので、自らの伝統文化を西洋文化と比較し、選別しながらその長所を学ぶ。学んだものを自分の伝統文化と結合させ、新しいものを作り出していく。同時に両者間の対立を適切に処理していく。日本の近代化過程も現在アジア各新興工業国の現代化過程も例外ではない。²

江戸時代(1603~1867)の日本社会は農耕社会であり、90%の国民は土地に束縛されてはいたが、農民は完全に無権階級ではなかった。農村部の基礎組織は一種の自治体に似ており、組織の長も農民がなっていた。ある意味で一種のゲームになっていた。地租を減らして幕府と各藩が低い行政コストで税金を獲るか、逆に高い行政コストで地租をあげるかである。運輸業と商業の発達が幕府の商業政策の実行と必ずしも直結していなかった。国土が狭いため、江戸中期より国内の統一市場が既に形成された。

当時の初等教育はかなり普及していた。江戸と大阪に科学と文学を教える学校は既にあった。一般庶民向けの教育機関は関西に於いては寺子屋、関東に於いては手習い指南所であった。明治初期にすぐ義務教育を実施できたのは江戸中期から基礎が作られてきたからである。経済面では、徳川幕府の時から商人階層が形成され、日本に専門的な経験を持つ企業家階層が存在していたことになる。彼らは自身が経営活動のなかで蓄積した富を再投資に投入するだけでなく、社会に経済発展に必要な労働力資本も準備し、明治時代の殖産興業に貢献した。

近代化の後発国として、日本社会の発展過程に矛盾がずっと付き纏っていた。国家権力で押し進めなければ、近代性は社会発展の遅れで成長空間が圧縮されるが、国家権力の巨大化は経済、社会発展に適合した公民社会の形成を妨げ、自由と創造の可能性を摘み取ってしまう。日本に於いては、国家主導の近代化の道は1868年の明治維新で強力な民族国家の形成に始まり、その後の軍事拡張、対外拡張、1931年から1945年までの戦時体制が続き、1945年8月15日にととう終止符が打たれた。

おわりに

経済成長はそのまま社会秩序の安定と発展を意味するものではない。社会混乱を防止する社会構造がなければ、変遷と成長は逆に危険を伴う。近代化の過程に於いて、ロシアの社会構造は慣例と宗教によって支えられ、君主制の封建政治国家になった。十九世紀のトルコは三大陸を跨ぐ大国だったが、社会生活が宗教と法律下に置かれ、国家との一体感が乏しく、持続的な発展ができなかった。日本の社会には明らかな同質性があり、共通の言語と文化がある。宗教は神道、儒教、仏教の混合物で、宗教間に深刻な対立がなく、近代化の波に巻き込まれても、社会は臨機応変に対応できる点は日本の近代化が成功した一因である。

中日両国はお互いに他所に引越しできない隣国であり、日本社会の深層構造と伝統文化に中国と関連性を持つものが多く存在している。二千年にわたる社会発展のなかで、日本は独特な形で今日まで歩んできた。成功の経験も失敗の教訓も中日両国にとって貴重なものになる。本論文は二度の外来文化との遭遇に日本がどう対応したかを内外の両面から検証したが、中日両国の社会発展、経済発展、中日関係の友好且つ健全な構築に少しでも役に立てればと心より願っている。

注

- 1 家永三郎『日本文化史』1988年、50ページ。
- 2 富永健一『日本の近代化と社会変動 テュービンゲン講義』1990年、38~39ページ。

参考文献

福沢諭吉『文明論之概略』岩波書店、2012年。
吉田茂『日本を決定した百年』中公文庫、2010年。

梅棹忠夫 『近代世界における日本文明 - 比較文明学序説』 中央公論新社、2000年。

富永健一 『日本の近代化と社会変動 テュービンゲン講義』、1990年。